長野県短期大学紀要　第50号　269-281頁　1995年12月

野上弥生子の方法（二）

――「黒い行列」「迷路」と日記――

宮尾俊彦*

一

野上弥生子[1]の日記は、大正十二年七月三十一日から昭和六十年三月十二日までの分が、ノート一一九冊に遺されている。その内大正十二年七月三十一日から八月二十四日までのものは、日光湯本温泉へ一家五人で避暑に行った際の記録であり、そこで一旦中断して同年九月一日から「大地震の記」と題される十月十一日までの日記が書かれることになる。そして十二月十四日から二十六日までと、十三年一月六日から四月二十七日までの日記、更に一か月余りとんで五月三十一日の記事があって、以後長く中断する。

大正十三年十月十三日に再開された日記は、以後度々の「怠り」やらで空白はあるがずっと書き続けられることになる。

弥生子の日記は、避暑旅行や大地震といった特別な行事、事件を記録に残そうという意図から始められたもので、日々の日記を書き続けようという格別の意志はなかったようである。弥生子が日記をどう捉えていたか、それを大正十三年五月三十一日の日記にみてみよう。

久しく日記を怠つてゐた。理由はいろ〳〵ある。日記と云ふものが人間の一日の心の波の高低を決して残し得ない失望もあつた。

同趣旨の考え方が以後しばしば日記中に見え、再開された同年十月十三日の日記にも、

今日までまた日記が中絶してゐた。今日からまた始めよう。例によつて人間は日記に本統の生活を委しく残すことは出来ないのである（後略）

とあるように、偽りのない気持ちや真実が必ずしも書き残せないのだ、という日記そのものに対する不信感があったのである。そうした日記観をもつ彼女が、にもかかわらず六十年余にわたる膨大な日記を遺すことになった理由を、十四年一月二十日の記述にみてみよう。

これで日記帳を新たにすることが三度になつた。かりそめにはじめたものが、時々の杜絶えはありながら、斯うして続いたのは珍しくもあり、たのしくもある。兄さんは日記をかいて何になるのだととき〴〵云ふ。実際私たちは日記にさへ完全な真実

*〒380　長野市三輪八-四九-七　長野県短期大学

を盛つてはゐない――と云ふよりは日記にさへ真の生活の姿を完全には描き尽せないと云つた方が分かりよいであらう。私の日記にしろその日日の複雑微細な心の影を悉く書き記してはゐない。それは不可能事に属する。しかし生活の渣滓だけでも、とゞめて見ることは、毎日が殆んど泡のやうにはかなく消え、すぎ去るよりも幾らかの慰めである。広漠たる人生の砂上にかすかについた自分の足跡をふり返つて見ようとする時の道しるべに、いつかならないとも限らないであらう。

自己の足跡を記録にとどめておこう、それがはかない人生の慰めともなり、指針ともなつてくれるのではないかというのである。しかし、作家である彼女は日記に更なる目的を持たせ、そしてそれを十分に活用してきた。

午前つぎの段落にかゝるため、昨年の日記をよみ返して見る。ほんとうにつけておいてよかつた。もしこの日記がなかつたら、これほど生き〳〵とその当時の感銘を再現することはむづかしかつたであらう。(昭9・7・29)

これは夫豊一郎がその渦中にあった所謂法政事件の顛末を材料にした小説「小鬼の歌」執筆中の日記である。見聞した事柄を日記に記しておき、それが創作の助けになっている例は弥生子の場合数々みられる。彼女の作品の一特徴ともいえる多彩な比喩、その比喩についての思いつきを書き記したものも日記中に多数みられる。つまり弥生子にとってその日記は、単なる日々の記録、感想を書き留めたものであることにとどまらず、一つの創作ノートにもなっているのである。従ってわれわれは、その日記から彼女の小説の創作過程をうかがうことができ、推敲の跡を辿ることもできるのである。

なお、弥生子がその日記の公表される日のあることを予測していたことは、つぎの記述からも明らかである。

(前略)――こんな花の代価を敢へて書きつけるのも、何十年かたつて、この日記がもし公表された時、時代的に比較してゐるおもしろさがあらうと思ふからである。(昭19・4・14)

また朝日新聞平成七年八月三十一日朝刊の記事「野上弥生子没後十年展」にも、三男野上燿三氏はその講演の中で、弥生子は他人を意識して書いた日記は本当の日記といえるかを夫と議論した折、「自分だけのために書いたものでも、文字として書く以上は第三者を意識していると、母がはっきりいったのを、おぼえています。」と述べている。

小稿は、弥生子の代表作である『迷路』の創作過程を日記との関わりにおいてたどってみることによって、その小説作法を探ろうとするものである。

二

小説『迷路』は、周知のごとく昭和十一年十一月号の『中央公論』に「黒い行列」と題して掲載され、翌十二年十一月号の同誌に続篇が「迷路」として載せられたのが原形である。そしてそこで十数年の中断を経て、戦後改稿の上単行本として刊行され、その後続篇が書き継がれていくという成立過程をとっている。従って十一、二年発表のそれと、改稿改題された戦後のそれ(以後「改稿本」という)との間にはかなりの異同がみられ、相当量の加筆、挿入がなされるが、その過程についての考察は続稿に譲りたい。

さて、「黒い行列」「迷路」についての記述が初めて日記に登場するのは、昭和十一年五月十三日である。

夕方道家チヤさん来り、牛肉で子供たちと会食。私が今度書か

うとして、すでに二枚手をつけかけてゐるものにつきいろ〳〵彼からきゝ度いため。これは昭和五六年にもつとも盛んであつたプロレタリア運動のために、その順当なコースから放ねとばされた若いインテリゲンチヤの一群を描かうとするのである。彼らが現時の社会情勢の中にもつてゐる存在のすがたと動向をも描き度い。云はゞ若い息子とまち子のあとにつづくものになるだらう。私としてはもつとも魅力の多い、しかし中々むづかしいテマである。つまらない雑文生活から脱却してこれのみを描き度い。

ここには作品のテーマと作者の意気込みとが書き表わされている。西欧文学を意識し、そのスケールの大きさと歴史に育まれた重厚な思想とに圧倒されてきた弥生子は、自身もいつかは大きなしっかりした創作をと常に志していた。売文と卑しみながらもなお時には生活のために原稿を売らねばならなかった彼女をして、大作『迷路』に駆り立てたものは何だったのか。私はそれを二・二六事件ではなかったかと考える。当時弥生子は台湾旅行の紀行文「台湾游記」を執筆中であった。「それがすんだら一つしつかりとした創作を発表しよう。物質的には苦しくなるか知れないが、しかしおもふと愉しみだ」(11・2・21)といっているが、その「台湾游記」執筆中に事件は起こったのであり、それが一層彼女に鞭を入れたのではなかろうか。

いずれにしてもこの年の五月十三日から弥生子は『迷路』の執筆に専念することとなる。十六日の日記には更に具体的に人物設定などが記される。

主人公は共青ぐらゐにカンケイのあつた、二十六七の転向者、文科、消極的。肉体的の虚弱も手伝つてなんらの希望ももちえない、と云つてそれほど良心をマメツしてもゐない男、その対称をなす若い女性、インテリの鋭い、しかし高慢な、現実主義者。

今はまだこれだけしか輪郭が出来上つてゐない。

その虚無的に弱い主人公と反対にもつとも活動的な転化者(ママ)を描かう。黒沢、おぢのバカな大学教授、その俗臭ふんぷんたる家庭。(中略)とにかくこの仕事を私の今後の文学的な運命を賭けるものにし度い。

ここには主人公菅野省三とヒロイン多津枝、友人木津といった主要な人物像が示されている。転向者であり、良心が摩滅していないという省三、インテリの鋭い、高慢な現実主義者の多津枝の姿が明示されている。省三と対称をなす木津もまた活動的な転向者として設定されている。なおこの日は、稲の害虫の研究をしているという道家氏をもう一度招いて話を聞いている。そして彼をモデルとした青年を「ワキ役として登場させよう」と記しているが、それは小田として形象化される。

テーマがほぼ固まり、人物像のおおまかな設定ができあがれば、弥生子の文学的運命を賭けた作品のスタートは目前である。

午前いよ〳〵執筆にとりかかる。「遠い路」とするつもり。まへに半ピラで二三枚かきかけたのを直しかける。(5・24)

『迷路』第一部「黒い行列」の執筆開始である。五月十三日から十日余りで構想は固まったのである。既にその間に二、三枚書きかけていたわけで、試行は始まっていた。「遠い路」とは青年たちの前途が容易でないことを表わしているのであろう。

しかし執筆は必ずしも順調とはいえなかった。「執筆遅々」(5・27)「執筆は入れた網のたぐり寄せ方がどうもまだはつきりしないと云つた形である。まだ大学の銀杏の並樹のところをほうこうしてゐる」(5・29)

「銀杏の並樹のところ」とは、「黒い行列」で半ピラの原稿用紙四枚ほどのところにある東大安田講堂への銀杏並樹のあたりの描写の部分である。五月二十九日の記事には、その並樹からの安田講堂の視界の具合を実見して確かめるべく、夫豊一郎を連れ出してわざわざ行って現地に立ってみる。そしてその実地に検証されたものは作品に生かされた（ただし改稿本では書き改められている）。いずれにしても書き始めはしたものの進度は悪く、「この頃はほんの二三行の進度ながら執筆をつづけてゐる」（6・4）「執筆二枚半」（6・6）といった具合である。この「ほうこうしてゐる」場面は、まだ在学中であった省三が左翼運動に加わっていた頃を回想している部分で、作品の時代背景の説明ともなり、主人公の過去をうかがわせることのできる重要な部分といえよう。従って、自由な執筆が保障されるようになった戦後の改稿においては大幅に加筆されている部分でもある。しかし当時の時局下においては最も意を用い、慎重を期さねばならなかった部分であり、伏字をまじえながらの苦心の執筆であったと思われる。筆の運びがままならなかったのもいたしかたのないところであろう。

日記にはその後半月ほど執筆に関する記事はなく、六月十八日に北軽井沢の大学村に移る。いよいよ腰を据えて専念しようというのであり、その二十日あたりから執筆が再開される。

仕事はやつと順調なコースに入り、今日めづらしく半ピラ六枚強。座れば収穫のある程度にまでなれば大丈夫である。予定のものよりずつと長いものに――一部分的でなく、真に今日の社会を全体的に浮彫りしたやうなものにし度くなつた。私が拵へるのではない。毎日のペンがひとりでに私を好きな方に引っ張つて行くのだ。（6・22）

「一部分的でなく、真に今の社会を全体的に浮き彫りしたやうなものにし度」いという記述は重要である。『迷路』という作品のもつスケールの大きさ、単にインテリゲンチャの若者たちを描くだけにとどまらず、政財界から軍部、更には江島宗通を中心とする華族社会や伝統芸術の世界、地方の生活、貧困な階層にまでその世界を広げようと意図していることがわかる。もちろんそこには弥生子の手に余る世界もあり、不充分なところ、至らないところは指摘できるのであるが、その意図するところは評価できようし、意欲にも注目してよいであろう。昭和十年代の日本をトータルに描こうという壮大な意図がそこにはある。

ところで弥生子をしてそのように広く各界に筆を及ぼすことを可能にしたものは何なのか。そこには彼女の社交の世界の広がりが大きくかかわっていよう。その境遇からして学者、文士の社会は当然彼女の世界に属するわけであるが、当時大学教授になり得た者の多くが上流の階層に属する人々であったことを考えると、夫豊一郎との関わりによって広がる社交の範囲は容易に推測できよう。またこれも夫の関係からかかわりの深かった能楽界の人脈からの広がりもあったであろうし、更には北軽井沢の大学村に集う人々、野上家はこの大学村開村時からのメンバーであり、この別荘地の肝煎的存在であっただけに、そこからの広がりは広く深いものがあった。いずれにしてもこれらの要素は、弥生子自身のものというよりは、夫豊一郎にかかわる世界から生じたものが大きいことに注目しておきたい。

一方、弥生子の作品には彼女の思想的、政治的信条ともかかわって、下層階級、貧しい人々が重要な役割をになって登場する。「黒い行列」の木津とせつはその一例である。しかし、そのような農民とか労働者といった底辺の世界を充分描ききっていない、とする批判が彼女には常につきまとった。そこは弥生子が属する

上、中流の階層社会とは異質の世界であり、彼女の殆んど実体験することのできなかった世界であっただけに、観念的な理解にとどまらざるをえなかったのだと考えられる。弥生子が所詮は特権階級に身をおいた人であったことは、その日記の随処から伺えるところであり、弥生子の作品にその意味での限界があるのはいたしかたのないところであろう。

以上のように六月二十二日の日記は、小説『迷路』の構想の広がり、長編化を示唆しており注目される。そしてこの日以後筆の運びは快調であり、「ウン〳〵苦しむやうな事」もなく進む。ところが七月下旬ぐらいから日記に関係記事がほとんどみられなくなり、九月七日の記事に「今日までとうと日記を怠った。（私注8・24～9・6）これはいつもの書きものゝための怠慢ではない。毎日の多忙とその疲労がペンをとる気もちにさせなかった。」と記されるような中断もあった。その前、八月二十一日に「十一月号の件。百枚か百五十枚でよみきりにして、そのあとはまたあとでつゞける事に約束する。」とあるのは、雑誌『中央公論』との話し合いである。

九月中旬からは再び執筆は順調になり、「坐れば水が低きにつくやうにペンが流れる」（9・27）とまでいう。

午前――はつきり分らないが九時過ぎ頃とうと仕事のペンをおいた。すんだ時はどんなにほつとして嬉しいだらうと考へてゐたが、それほど強いかんじが起らなかつた。それは結末のさせ方に少し疑惑が残されたからかも知れない。しかしあとを書きつゞけるとすればこの形でとめるのが有利で都合がよささうにおもへる。とにかくこれで済んだのだ。（11・10・6）

さてこの記事に「結末のさせ方に少し疑惑が残された」とあるのはどういう意味であろうか。「黒い行列」は、「百枚か百五十枚でよみきりにして、そのあとはまたあとでつゞける」という心づもりであるから、一応「よみきり」にしたいわけだが、この結末が必ずしも「よみきり」の形になっていないと考えたのではなかろうか。つまりこの部分での省三と多津枝の接吻があまりに唐突であり、その意味づけが全くといっていいほどなされていないということではなかろうか。「つゞけるとすればこの形でとめるのが有利で都合がよささう」とはいっているが、さてどうであろうか。たとえその接吻が衝動的なものであったとしても、どこかにそれが必然の結果だと思わせるものがなくてはなるまい。「附記」として、「この作物はこれだけで纏まつた一篇として読んで頂き得ると思ふ」と記すが、まとまった一篇とするには不充分であったと私は考えるのである。なお、改稿本におけるこの部分の改稿の意味については、続稿で触れることとする。また、この日の日記には、

すぐあとに書きつゞけようと思ふものが頭の中にもや〳〵してゐる。これはよい前兆である。あのトリを連れて来るのだ。軽井沢に対するこれらの山村の極度の貧困な生活から描きはじめよう。

という記述があるが、「あのトリ」とは何なのか、今はわからない。「軽井沢に対するこれらの山村の極度の貧困な生活から描きはじめ」るという構想は実現しなかった。そして、続篇に手がつけられるのはこの日から凡そ三か月半後の翌十二年一月二十七日のことであった。それは総選挙と二・二六事件から始まる。

三

十一年十一月二十四日に中央公論社より「黒い行列」の続篇の依頼があったが、なかなか筆が執れない。「先きに横はる困難な

仕事をおもふ気もちが一つと、一つはまた黒い行列についての期待をはづれた受け入れられ方が私の勇気を少し挫いてゐるためもあるらしい。」（11・12・2）といった事情があったようだ。「先きに横はる困難」とは、時局柄二・二六事件などを扱ったものを書き続けることの困難であろうし、また「期待をはづれた受け入れられ方」とあるのは、例えば「帝国大学新聞」に載った島木健作[3]の批評のようなものであろう。その批評に対して弥生子は十一月六日の日記で次のように反論する。

島木氏はあの転向者らがいかにも薄手で真の煩悶をしてゐないことを攻撃し、最後に省三が多津枝なんぞと共に泣くことを怒つて、なにか侮辱されたかんじがすると云つてゐる。彼の攻撃にも一面の理がある。しかし彼はかう書いて貰ひ度いと思ふ型の転向者を書いてないと云つて咎めてゐるのは一種の身ビイキである。しつかりした、手強い転向者もあればさうでないものもある。作者の興味は転向者にも彼の軽蔑してゐるブルジョワ・マダムにも同じやうに熱心に注がれてゐる。両者とも今の現実のおもしろい対象物であるから。真摯な求道的な転向者の群を描かうとしたのでは私はない。私は現在の日本の社会の各断面を同じ興味と熱心でエグリ抜いて見ようとしたのである。自身が転向者である島木にとっては、省三はいかにも軟弱に甘く描かれているのであろうが、転向者にもブルジョワ階級にも同じように興味を注いでいるところにこそ、弥生子の視界の広さがあり、時代をトータルに描こうとする意図がうかがわれるのである。[4]

さて続篇「迷路」の稿は十二年一月二十七日に開始される。朝ペンをとりかけた。内閣が解散され、選挙が行はれた。といふ一句をえたのだ。

野党政友会が内閣不信任案を提出、それを受けて岡田内閣は議会を解散した。約一年前の昭和十一年一月二十一日のことである。二月二十日第十九回衆議院議員選挙が行われ、無産党が勢力を伸ばしたのは作品中にもあるとおりである。日記には「内閣が解散され」とあるが、これは無論「議会が解散され」の誤記である。執筆が再開される四日前、十二年一月二十三日に広田内閣が総辞職をしたことと関連してこんがらがったのであろう。

二十七日の日記には続いて、「岡田内閣がどうしてカイサンを敢行したか分らなくなつたのでミノベさんにとひ合せの手紙をかいた。ミノベ先生に伺つて頂くため。」とあるが、このミノベ先生とは、当時天皇機関説問題で貴族院議員を辞職していた美濃部達吉博士であり、ほぼ一年前弟金次郎が選挙違反に問われて留置され裁判となった時にも、弥生子は美濃部博士を頼ってその助力を得ていたことが日記にみえる。

執筆に一二日まへから着手。今はまだ頭の醗酵に資する程度にただペンをとつてゐる。私には社会的に意識のレンカンなしにはなんにも書けない。今度のも議会が解散され、総選挙が行はれたと云ふ一句によつてやつとペンが動きはじめたのである。（12・1・31）

「社会的に意識のレンカンなしにはなんにも書けない」ところに、文壇とは無縁に生きた弥生子の文学の本領がうかがえよう。

執筆はその後も遅々たる進行で、二月二十五日になってようやく「執筆、進行せねど、進路はほぼ探り出した形」となり、三月一日には「この間から引つかゝりのところをやつと通過した。」とあって次第に進行したようである。「ひつかゝりのところ」がどんなところなのか、手がかりはない。

三月二十四日の日記は、「この間から二人の女たちを引つこま

せるのに苦心してゐたが、どうにかそれが始末がつき、書きものの上の重いロールがやつと少し動きはじめた。」と記すが、この「二人の女」とは『迷路』でいえば「黒い流れ」の章における垂水夫人君子と増井夫人松子（槻子）のことであろうか。「ロールがやつと少し動きはじめた」といっても筆の進みは相変らずにぶかったらしく、日記にも関係記事はめったに現われない。それでも毎日の執筆は怠らなかったようで、「今日は婦公の随筆をちよつと書くために毎日の日課の方の執筆は中止。」（3・27）といった記述からもそれは察せられる。

仕事は東京からこだわつてゐたところが旨く繋がり、あとの章の糸口も工合よく見つかる。店びらき上々の首尾。（6・14）

六月十二日に北軽の別荘へやってきて三日目の記事である。「あとの章」とは何をさすのか。この日から以後連日、日々の執筆枚数を記載しているのでそれを逆算してみると、どうやらこの日の記事でいっているのは改稿本の「熊掌と爪」の章の終末部分ではないかと推察される。「こだわつてゐたところ」とは、佐治との約束を楯にとって多津枝が稲生国彦の誘いを強引に辞って約束の場所へ行こうとする場面であり、その続きをどうするかで迷っていたのではなかろうか。結局は佐治に送られて車で帰宅する場面をもってきて、このところに決着をつけている。うまい結末といえよう。

「あとの章の糸口も工合よく見つかる」とあるが、次は改稿本でいう「夕雲」の章に当るわけで、この章は省三が小田と二人で木津の家を訪ねた場面と、妊娠中の木津の妻せつが病院に診察を受けに行ったところが中心になる。先の「熊掌と爪」の結末は、多津枝が佐治に送られて銀座を走る車中から、女連れの木津を見かけたところで終っている。その女連れの木津を見かけるという場面を思いついたことが、「あとの章の糸口」云々になるのであろう。つまりあとの章での木津とせつの夫婦関係の記述と結びつくことになるわけである。私が「うまい結末」と書いたのはその意味であった。

北軽井沢に来て環境も整った故であろう、これから七月二十六日の「仕事の最後のペンをとにかく置くことが出来た。」の記事が書かれるまで執筆は極めて快調であり、「今日も進度変らず、七枚はらく〳〵と行く、八枚もガンバレバ行くが無理である。まあ急がず行かう。先きの光明が見えだした。」（7・4）「今日は約十枚行つた。おもしろいほど進む。」（7・6）といった調子で進んで、擱筆となるのである。

その後この作品に関する記事は一、二みられるだけで、九月十二日になって次の記事がみえる。

中公の十月号にのせる筈の『迷路』の校正をまだよこさない。三四日まへ催促してやつたが、もしかしたら時局がらでビクついてゐるのかも知れない。あてにしてゐるのであればムダになると困つて仕舞ふ。まさかそんな事はしないと考へてはゐるが。「あてにしてゐる」とあるのは原稿料のことであろう。実はこの九月十二日の日記は、八月十九日以来約一か月の空白をおいてのものであった。

なんと久しく日記を怠ったらう。いつもの仕事のための怠惰とも云ひえない。（中略）一言に言へばなんか面倒臭く、しみじみと日記帖でもくりひろげる気もちになれなかつたと言つてよいであらう。

と書く。そしてこれに続いて、

戦争はます〳〵規模と深刻さを増して行つた。四十万人とか六十万人とかがすでに動員されてゐるらしい。

とあり、夏目伸六の召集、京城大学の屋上には高射砲が据えられ、市内は毎晩燈火管制をしているといった記事、そして北軽を去る阿倍能成との別れの挨拶についても、

左様なら、お休みなさいのあとにも、くれ〴〵お気をつけになつてと言ひ添へる挨拶もいつにない事であり、またそれをお礼を云つて受けて去り行くのも毎年の夏の別れとは違ふ。

と記す。時勢は切迫してきている。先の「時局がらビクついてゐる」ということばはそんな情勢の中でのものであった。

その心配していた校正も十五日には届き、十月号掲載の予定が十一月号になった。その後十七日に校正の記事があり、「あれほど念を入れたものが不満だらけである。がつかりする。」と、トーマス・マンやサン・テクジュベリらの作品と比較してがっかりしている。「まあ失望しないで、これからますますよいものを書くやう精進しよう。」と続けてはいるが、その後『迷路』にかかわる記事は全く途絶えてしまう。『中央公論』十一月号には掲載されたはずであるのに、そのことさえも日記には記されてない。どういうことであろうか。

日記は始末をつける必要があるらしい。平塚さんの家にでも一とまとめにして預けようか。(13・1・12)

夜岡田禎子氏より電話。警視庁から明朝九時に出頭せよと云つて来たとの事。岡田さんなどに思想関係のありやうはないのに何用かと不思議千万であるが、とにかく行つて様子を知らせると云ふ。(中略)日記を一とまとめにする。(13・2・7)

このような記事からも知られる情勢の中で、『迷路』の執筆は断念せざるをえなくなったのである。

(『中央公論』から)四月号に若い学生に与ふる手紙を書かないかと云つて来たが断はる事にする。書き度いやうには書けないのが分つてゐるし、書き度くないやうな事を書くのは良心的でない。沢山云ふべき事があつてもそれで云へないのだから。石川氏の「生きて〔ゐ〕る兵隊」で発禁になつたときく。(13・3・4)

「日本の社会情勢の変化はそれを書きつづけることを許さなかつたので中絶」と書いた、戦後の文庫本化にあたっての「附記」のことばそのままの心境であったろう。

四

前節まで、「黒い行列」「迷路」として昭和十一、二年に発表された部分について、その成立の過程のおおよそを辿ってみた。本節では日記中に見られる作者の見聞、体験のさまざまが、作品の中に具体的にどう反映され、どう活かされているかをみてゆきたい。

①久しぶりに大学の構内を歩りく。美しいが一つのビルディング街のごとくなつてしまつた。もとのこんもりと生ひ茂つた幽すいさをおもつた。(昭9・4・24)

「ただ校舎だけはどれも立派になつたものだねえ。」

小さい芝生について曲がりながら、省三はその言葉にすべての感慨をこめた調子で、美しい卵いろの壁でつづいた建物を見廻した。

「しかし木津に云はせるとね、かうたて込んじやまるでビルディング街で、学問取引所がずらりと軒を並べたかたちだと云ふんだ。」(『野上弥生子全集』第九巻16～17ページ。以下はページのみを記す。)

日記は、作者が東大の眼科医局に検査を受けるため訪れた時の感想であり、それが小説の木津の批判に活かされている。もっともそれには省三の重い感慨が托されているわけであるが、弥生子は「こんなことも見なければ考へ及ばない」(11・12・21)という。

②小林啓さん一家が午後から来て、それに明朗が加はつた大一座の夜食をした。(中略)また人間のイレズミした皮膚をきれいになめして紙入れにしてゐる医者の話も。(11・1・6)

多津枝は女子大時代の友だちの義兄にあたる医者は人間の皮膚で財布を拵へてゐると云ふ話を乗り気になつてつづけた。(ペ30)

「イレズミした皮膚」は、高橋おでんの入れ墨した皮膚を展示した五月祭の部分に、そして「人間の皮膚をきれいになめした紙入れ」の方は、やはり財布の話に活かされている。なお戦後の改稿本には、フランス革命の際のギロチンの犠牲者たちと革屋と仮髪(かつら)の話が加わるが、それはカーライルの『フランス革命史』から得た知識であり、日記には「ギロッチーヌにかけられた貴婦人たちの金髪で、カツラ師大繁昌したこと、ムードンの製革者はまた剝がれた人間の皮で、強靭ななめし皮をつくるのに多忙を極めた話」(21・1・31)とある。この『フランス革命史』は一月十五日に読み始められ、二月一日に読了している。彼女はその得た知識を早速に活用しているのである。

③父さんと本郷座に「ミモザ館」を見るために出掛ける。(中略)その前に「萌えいづる春」と云ふ題で非常に感銘の深い学術映画を見たので早く行つた甲斐があつた。(後略)(11・2・18)

とあってその内容が紹介されている。それを「黒い行列」では妹と観てきた学術映画ということで、多津枝が木津に説明している。日記では、「ものゝ伸び育たうとする力、成長せんとする意志。これは何ものをもつてしても圧せ潰(ママ)されないものだ」として、生きものの成長力の強さというところに力点をおいて弥生子は書きとめているが、小説では、

鈴蘭の種子を埋めた小さい植木鉢の上に一枚の硝子板が載せられてある。種子が芽になり、芽が茎に伸びると硝子板は数十本の草のあたまで徐徐に植木鉢のふちから押しあげられる。あたかも一枚の戸板を小さい子供たちが群がつて諸掌でさし挙げてゐる恰好で五六寸の空間にしばらくそれを支へた後、えいといふ掛声とともに、硝子板は地べたへはね反される。(ペ73~74)

という多津枝の説明を聞いているうちに、木津の「形のいい唇が締まり黒い滑らかな顔の筋肉がなにかきゆつと引つ張られたやうに一瞬硬ばつ」て、「叫び出しさうに見えるだけでも草は人間より増だ。少なくとも黙つてただ突つ立たされてゐる、現在の無数の芦の群よりも。」という、転向者としての木津の苦い感慨へと導かれていく。力を合せて黒い圧力をはねのけることのできなかった自分たちの無力さ、意気地なさへの苦い思いである。頻用される比喩表現の中でも、この部分は作者自身が感銘した映画を素材にしているだけに、特に秀抜な描写になっているといえよう。

なお日記では、「鉢の上にガラス板、その上に鉄のフンドウをおく」とあるが、なぜその鉄のフンドウを小説では省略してしまったのであろうか。当時の暗く重い時代相、木津たちの重苦しい心情の表現には、フンドウがあっても差しつかえなかったのではないだろうか。

④午前上海の復旦大学で社会学と日本語を教へてゐる陳君、小さい娘陳恵媚を連れて訪ねて来る。法政出身なり。支那の話をい

ろ〳〵きく。（11・8・1）

（木津は）それでまた急に思ひついたやうに、さう云へば、支那の黄と云ふ男に逢つた話をまだ君にしなかつたねえ、と云ひ出すのであつた。（中略）

「（略）その男は日本のどこかの私立を出て上海の大学で教へてゐたらしいが、（後略）（ペ34）

この「陳君」は日記中にもう一度登場する。

岩波から中国の陳文彬さんの手紙を廻送して来る。北軽で逢つてゐた、即ち「迷路」の黄安生で、おもひがけなく、なつかしかつた。（32・1・18）

この日の日記には更に「彼が私に教へてくれた二つの中国の話が、いかに大きな影響を私に、またあの作品に与へてゐるかは、考へても不思議なくらゐである。」とある。この陳文彬の手紙について弥生子は「陳さんの名刺と手紙」と題した小文を『文芸春秋』（32・3）に寄せている。そして彼の誘いで念願の訪中も果たした。この陳氏は昭和五十年に亡くなり、弥生子は弔問の手紙と花輪を送っている。

陳文彬からきいた支那の二つの政府の話、毛沢東、朱徳の名前、中共軍の勢力圏に属する土地が日本の全国土よりも広いこと、一億以上の人口を有していることなどは、小説にもそのまま引かれている。また、支那の地主は二、三千町歩から一万町歩ぐらいの土地を所有しているのが普通で、日本とは桁違いだという話もそのまま取り入れられているが、陳文彬の所有する土地が日記では六十町歩となっているのに、小説の黄の土地を六百町歩としているのは小説的虚構ということになる。六十町歩と二、三千町歩、一万町歩とでは、同じ地主とはいえ、それこそ桁が違い過ぎるがゆえの虚構であろうか。

なお、改稿本には国府軍と中共軍による内戦、中共軍の延安への長征のことなどが書き加えられている。長征の終りが昭和十年十月であるから、「黒い行列」執筆時には既に長征は過去の出来事となっており、陳文彬の話の中にも当然出てきたものと思われるが、なぜか「黒い行列」にはそのことがみえない。当時の弥生子にとっては、この長征の意味がさほどのものとは受け取れなかったのであろう。

⑤阜山荘で仕事をしてゐると、午後三時まへに父さんが来て驚くべきニュースを知らせてくれた。（11・2・26）

いわゆる二・二六事件である。阜山荘とは弥生子がその前月から借りて仕事場にしていたアパートである。この日から三月の初めあたりまでの日記の記事の大部分は、この事件のことで占められている。「黒い行列」の続篇「迷路」の執筆に当って最も日記の恩恵を受けた部分であろう。

電話がうちから来たので、今事務室に行つて見るとアパートの人々がその噂をしてゐた。（中略）そこへ先生と呼ばれる小柄な男が雪に濡れて帰つて来て内閣の諸氏の殺された事を伝へた。（同前）

昼過ぎにベッドから辷り出て牛乳を飲んだついでに、彼はどてらのまゝ電話をかけに降りた。（中略）禿げ頭の太つたアパートの主人に出逢ふと、いきなり叫びかけられた。

「大変なことをやりましたねえ。」（ペ222）

電話をかけにアパートの事務室へ行ったところまで、そのまま小説の描写に使われている。そして夜間中学校で教えている若い教師が入って来て詳報を伝えるところも同様である。もっとも、

小説ではその教師の兄が新聞社に勤めていて、そこからの情報であるとも説明されている。これは同じく新聞社に勤める木津との関わりからの思いつきであろうか。

彼ら（騒擾軍）は尊王討奸の云ふ旗を押し立ててゐる。哨兵は見物のヤジウマに向つてわれわれは市民には決して迷惑はかけぬとか、われわれがかうしてゐる気持は分つてくれるだらうとか話しかけて、しきりに民衆の歓心をえようとする。それから又私有財産云々とか云ふ風な演説めいたことを云ふ。それに対してヤジウマは冷淡に、なにか茶番を見物する時のやうに笑つてゐる。（11・2・29）

（前略）兵士の警備した門には一条の大きな白旗が掲げられ、××××と四つの文字が雄渾に書かれてゐた。（中略）しかし兵士らは驕らず、親和的であつた。彼らは厚い列になつた群衆に近づいて自分たちから話かけた。（中略）此度のことは皆さんに迷惑をかける積りは微塵もない。――中学校の討論会まへに生徒が一生懸命に暗記し練習したものにどこか似てゐた。人々はただ無表情に耳傾け、もしくは微笑して聞いた。（〈294）

この情景も弥生子は知人から聞いた話として日記に記しているが、この兵士の民衆への訴えかけに対しては冷淡である。それはヤジウマの態度を、「冷淡に、なにか茶番を見物する時のやうに笑つてゐる」と描写しているところにもみられるし、「のぼせた叛徒」といったり、「民衆の共鳴と賛成をえない革命といふものはありえないから、彼らがいかにいきり立つたところで、彼らの望むやうな暴力革命が成功しようとは信じられない。」（2・28）というその姿勢からもうかがわれる。それに対して、小説中では群衆と兵士たちの間に会話を設定したり、兵士の態度を「驕らず、親和的」と表現したり、その一生懸命さを描写したりし、また民衆の様子を「耳傾け」「微笑して聞いた」と描写したりするところ、あるいは若い子供っぽい顔の二等卒の純情な反応の有様などから、事件から一年後の弥生子のこの事件への理解の深まり、ないしは、変化がうかがわれる。つまり、彼女がこの事件と左翼運動とには共通する社会変革への願望があったことを認識したということである。そしてそれが戦後の改稿本になると、一層本質的な認識へと深まる、つまりこの事件を「黒い流れ」という捉え方へと深まっていくのである。勿論戦後のそれは、時代、社会の未曾有の変化の中でのものではあったが。

⑥夜大分市（中略）から、金次郎が選挙違反でウスキ署に留置されてゐる旨を知らせて来た。困つたことだ。しかし重大事件を目前にしてゐるためか、それほどには驚かない。（11・2・27）

この弟の選挙違反事件はそのまま小説では省三の兄のこととして、やはり二・二六事件の翌日にその報知があったとして使われる。そしてこの違反事件は、この小説の舞台を省三の郷里へ移すという大きな役割をになっている。ただしそれは戦後の続稿においてではあるが。

⑦原田のけいこ。巴。立派に打てた。烏胴の方にしたのでなほ美しい音が立つた。（大正15・10・19）

一方を夫人の細つそりした肩で支へられ、春めいたおほらかに籠もつた音のうちに松風村雨の姉妹とともに打手をもいつしよに包みこみながら、優雅な烏肌は鳴つた。（〈303）

阿藤三保子夫人と烏胴の鼓、謡曲「松風」との関わり、そして烏胴の鼓と弥生子との因縁については、既に述べたことがあるの[5]

でここでは省略する。謡の師である尾上始太郎の没後（大正13）間もなく、弥生子はこの鼓を譲り受けているので、「迷路」執筆時には既に十数年間所持していたことになる。従って日記にもしばしば登場する作者自慢の鼓であった。

なお弥生子は「手帖」[6]に謡曲についてつぎのように記している。

私は今までにようこそしておいたとおもふものが二つある。それはギリシャ神話に親しんだことゝ、謡をけいこしておいたことである。ことにうたひのけいこは実に偶然の幸福を私の生涯にもたらしたものに外ならない。私は真の意味に於ての日本といふものをこれ等のうたひの中にはじめてかんじ、はじめて知つた。（大11）

その「真の意味」における「日本」を感じさせる能楽の伝統を護持するべく、異常な情熱をもって厳しく対処したのが小説の江島宗通であった。

⑧（イタリア大使館招待の夜会で）私のテーブルは右黒田さん、左三原さん。前にベルトラメ・能子らしい女と並んで大倉喜七郎がゐた。痩せた、青黒い、いとも軽さうな男。彼のうちの支那人の料理人が、（中略）三年ほどすると味が日本化する。それでまた半年ほど支那に帰すと云ふ風な話をしてゐたのがおもしろかつた。――こんな収穫でもなければ間尺に合はない。（12・4・2）

彼（阿藤子爵）は自分の警句に嬉しがり、高い品のいい鼻の下に丁度その幅だけつけた黒い髭で笑ひながら、三年に一度づゝ北京に修業に帰すと云ふ稲生家の老コックに就いて語りつづけるのであつた。

「あちらでも一流の腕つこきらしいが、それで三年もすると味が変つて来るさうだよ。つまり日本風の支那料理になつちまふのさ。だからあの家ぢや留学のつもりで三年目ぐらゐに帰してやる。さうして五六ケ月も置いといてやるとまた支那の純粋な庖丁ぶりを取り戻して来ると言ふわけだよ。（〈307）

弥生子の長男素一はイタリア留学中であったので、こういう招待夜会にも出席する義理があったのであろう。「いかなる境地に出入しても、それを自己の進展と拡大に役立て得ればよいのである。」と前日の日記に書きつけたが、この夜の見聞も抜け目なく執筆中の作品に活かしているのである。なお、支那料理については六月二十九日の日記に、「小野鏡山氏を西片町に訪ひ、支那料理のことを少々きく。作中に使用するため。」とあるが、その翌日北軽井沢に移り、翌々日から執筆を開始して、そこで早速取り入れたのであろう。

以上、作者の日記をひもどきながら、昭和十一、二年執筆の「黒い行列」と「迷路」の成立過程をたどり、作者の日々の見聞、体験がどのように作中に取り入れられ、作品に反映しているかを探ってきた。弥生子の日記は、初めにも述べたように一種の創作ノート、創作メモの役割をもになっていた。従ってその作品の形成過程を知るよすがとしても有効な資料となっていることをみてきたつもりである。

〔註〕

（1）『野上弥生子全集』第Ⅱ期第一巻後記。
（2）同前第五巻後記。
（3）島木健作「薄手な青年」（『帝国大学新聞』昭11・11・2）（『野上弥生子全集』第Ⅰ期月報18）

（4）戦後の改稿本と島木健作の批判との関係については続稿で触れる。

（5）拙稿「野上弥生子の方法――『迷路』と能楽――」（『長野県短期大学紀要』第44号）

（6）『野上弥生子全集』第Ⅱ期第一巻所収。

〔参考文献〕

中村智子『人間・野上弥生子』（思想の科学社　一九九四年）